

# 津軽藩儒黒瀧藤太について

——昌平坂学問所・藩校に於ける活動——

黒 瀧 十 二 郎

## はじめに

津軽藩の藩校に関する研究には、羽賀与七郎「稽古館成立に関する一考察」<sup>(1)</sup>・「五井蘭州と山崎蘭州」<sup>(2)</sup>・「弘前藩の学風」<sup>(3)</sup>・「稽古館の用地と校舎」<sup>(4)</sup>、月足正朗「津軽藩儒兼松成言について」<sup>(5)</sup>がある。また『弘前市史』<sup>(6)</sup>（藩政編）第二章第四節「学問文化の興隆」は、両氏の執筆によるが、その中で藩校の創設・変遷、儒学及び儒者等の活躍について概括されている。笠井助治氏は『近世藩校に於ける学統学派の研究』<sup>(7)</sup>の中で、全国の藩校の特色・学風、諸学派の興隆展開とその消長について述べ、津軽藩の藩校を全国的視野から位置づけている。

前述のように『弘前市史』によれば、藩校を制度史的に概括しているが、まだ究明されていない部分が多く、今後の究明に待たねばならないことはいうまでもない。したがって、個々の学者の活動を調査することによっても、藩校の実態がより明らかになると思われる。

本稿は津軽藩儒（昌平学派）<sup>(8)</sup> 黒瀧藤太の文化二年（嘉永五年）（没）迄

に於ける、昌平坂学問所及び藩校での活動を素描したものである。最初に次のことをお断りしておく。藤太には著書がなく、また日記や記録類も現存しないので、藩儒としての生き方や思想等を詳細に知ることはできない。そのため、「藩日記」（国日記・江戸日記。市立弘前図書館蔵）から拾いあげた断片的な関係事項を中心として記述せざるを得なかった。

註（1）「弘前大学國史研究」第一八号

（2）「日本歴史」第一六六号

（3）「弘前大学國史研究」第三一号

（4）「陸奥史談」第三三三号

（5）「弘前大学國史研究」第五〇号

（6）弘前市史編纂委員会編。昭和三八年発行

（7）吉川弘文館 昭和四四年

（8）同右 笠井氏著書上巻一〇二頁

## 一 出自と兄弟・親戚

黒龍藤太は、弘前城下で庄兵衛の三男に生まれた。名は僚師、字を元師といい、藤太と称し、鳴鶴と号した。藤太の正確な生年月日は不明だが、「文化一四年丑年学問所分限帳」（国立史料館蔵）によれば、三二歳と見えるので、天明六年の出生と推定できる。没したのは嘉永五年二月一七日、六七歳であり、弘前城下の法立寺に埋葬され、智正院殿鳴鶴日勇居士という（墓碑銘）。

長兄は藤太の四歳年上の黒龍儀鳳であり、儀鳳については『津軽藩旧記伝類』三六八頁に、次のように記されている。<sup>(1)</sup>

黒龍彦助儀鳳、字、徳夫、弟藤太と共に儒学を以て鳴る。寧親公御代、稽古館学頭被仰付、文化元年二月御家老大道寺宇左衛門、書院番頭添田儀左衛門、其他数人御叱被仰付候、即彦助重役へ取入御政事向会谈に及候旨にて、御留守居支配へ御役下被仰付候。佐藤家記。

黒龍彦助、言行動作規矩に当り、頗る人望高し、当時巨室世臣争ふて之を聘し、其教授を受く、彦助がその家に至るを以て、栄えしと云ふ。又経国の識あり、大臣の知遇を得る厚きを以て、或は政事に預ると疑はれ遂に貶黜を蒙る。後年、奥瀬一学人に語りて曰く、予壮年交る処の学友、黒龍彦助兄弟を初め、菊池形左衛門、伊藤熊四郎、其他頗る多し、而して彦助言行一も間然すべきなし、一時儒生の巨魁なりと、彦助中年にして死去す。時人大に惜めり。著す処の詩文世間に多し。喫名雑話

右のことから、学者としての人望の高さがうかがわれ、また藩政を批判して藩主から叱責を受けたこと等が知られる。

笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』(上)一〇二頁には、「日本教育史資料」巻十二を出典とした簡潔な紹介が次のように見える。

○黒龍儀鳳 昌平学派、名儀鳳、称彦輔、<sup>(助)</sup>藩儒・稽古館教授、昌平校修学、林述斎門

儀鳳は、少壮にして江戸昌平校に入学し、祭酒林述斎に就いて程朱学を研修、学行俊秀をもって稽古館教授に拔擢されたが、藩政を批判し、その得失を論及したため、譴責に合って屏居、幾ばくもなく没した。儀鳳はその学識高邁、常に心を国事に馳せていたと言う。<sup>(3)</sup>

儀鳳の妹(藤太の妹でもある)の一人にやすがあり、中田勇蔵の妻となっていた。<sup>(4)</sup>したがって、中田勇蔵は儀鳳・藤太とは義兄弟にあたる。中田は、寛政八年藩校稽古館が創設された際に初代数学学頭に任ぜられ、同一〇年には江戸へ上り、天文学吉田靱負・高橋作左衛門至時・間五郎兵衛重富・伊能忠敬等に天文暦学を学んだ学者である。<sup>(5)</sup>

藤太の母(黒龍庄兵衛の妻、名前は不明)は薄田紋次郎の娘であり、薄田多門は藤太の母の弟であるから、儀鳳・藤太の叔父にあたっている。<sup>(6)</sup>笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』(上)一〇一頁によれば、「日本教育史資料」巻十二を出典とした簡潔な紹介が次のように見える。

○<sup>(薄)</sup>薄田多門 古学派、名利用、称多門、藩儒、稽古館副督学  
多門は寛政中、稽古館草創の際、副督学となって講説、その学は実践躬行を重んじ、人となり清廉方正、君子の行ないがあった。一藩子弟の従学するもの多く、藩老津軽儼淵(貞正)をはじめ、公族重臣の師事す

るものも多かった。<sup>(7)</sup>

以上のことから、黒瀧藤太には長兄に藩儒の黒瀧儀鳳、義兄弟に藩校の数学者中田勇蔵、叔父に藩儒の薄田多門がいたことが知られ、藤太が学者として成長する環境には比較的恵まれていたといえるであろう。

註(1) 「黒瀧家記」(筆者蔵)

(2) みちのく双書 第五集(昭和三八年)

(3) 紹介文中の( )は筆者が註(1)によって誤りを訂正したものである。

(4) 「中田家由緒書」(弘前市中田嘉彦氏蔵)。「黒瀧家記」

(5) 『弘前市史』(藩政編)四九五・五七二頁

(6) 註(1) 参照

(7) ( )は筆者が註(1)及び『弘前市史』(藩政編)四九五頁によって誤りを訂正したものである。

## 二 昌平坂学問所での研鑽と「文化律」改正作業

津輕藩の藩校は、弘前城の南側に隣接する場所(現東奥義塾高校の一角)に建てられ、寛政八年七月、三〇〇人余の入学生を許可して開校し、校名は稽古館と名付けられた。<sup>(1)</sup> 黒瀧藤太が稽古館に入学した年月日及びそこで修得した学問の内容については不明であるが、文化二年八月には二〇歳で経学典句に任ぜられた。<sup>(2)</sup> 稽古館の教官になったということは、多数の学生の中から俊秀としての抜擢によるものと思われる。

当時、藩では寛政改革にもかかわらず、天明の大飢饉の傷は容易に癒

えず財政窮乏に苦しみ、文化四年一二月には、幕府から一〇カ年賦で五〇〇〇両を借り入れた。<sup>(3)</sup> 一方、これまでの東西蝦夷地警備は、文化五年一二月の幕命で永久警備となり、それによって表高が一〇万石に格上げされたが、<sup>(4)</sup> 格上げの分だけ軍役等が増加し、藩財政の窮乏に拍車をかけることになった。

右のような事情で、藩ではすでに同五年二月一日稽古館を当分廃止し、規模を縮小して新たに弘前城の三の丸屋形を補修して学問所とし、教科目は経学・数学・書学とする旨が発表されていた。一〇月には学問所が完成して授業が再開されたのであった。<sup>(5)</sup>

藤太は縮小された学問所で、引き続き経学典句として教鞭をとっていたが、「国日記」文化一〇年七月四日の条に、<sup>(6)</sup>

一 七戸理左衛門倅貢八郎、黒瀧庄兵衛二男藤太儀、勤学登被仰付旨、夫々申遣之、(傍註筆者)

とあり、藩命によって江戸の昌平坂学問所に七戸貢八郎と共に入学することになったことが知られる。日教二〇日<sup>(7)</sup>で、同年八月一〇日に江戸へ到着した。入学した日は八月一九日であるが、藤太にとっては昌平坂学問所への第一回目の入学であった。

藤太と貢八郎が入学して佐藤一斎に師事するにあたり、「江戸日記」文化一〇年八月一八日の条により次のように見える。

一 黒瀧藤太七戸貢八郎申出候、林大学頭殿江入学被仰付候ニ付、先例之通謝礼金渡方申出之通、大学頭江金壹両ツツ、用人四人江銀四両ツツ、取扱人壹人江銀壹両ツツ、佐藤捨蔵江銀貳両宛、左候ハ御入用金式歩ト銀拾六両之旨申出之通申付之、(傍註筆者)

昌平坂学問所は幕府直轄の学校で、授業料は不要のはずであるが、津軽藩としては、自藩の学生を派遣して指導を受ける立場上、授業料に代るものとして、謝礼金を納めたのである。このようなことは先例となっていたように思われる。学生一人につき、林述斎（直接学生を指導する機会は少ないが、大学頭として学政を総掌する立場）へは金一步、実際に指導を担当する佐藤一斎には銀二両が支払われていることが知られる。

これとは別に、藤太と貢八郎は林述斎のところへ入学の挨拶へ出向き、鯛を贈<sup>(8)</sup>っている。

「江戸日記」同年二月二十七日の条に、

一七戸貢八郎黒龍藤太郎申出候、歳暮為祝儀謝礼金渡方、林大学頭様江佐藤捨蔵江百足渡方申出之通申付之、

とあり、入学に際しての謝礼金とは別に、歳暮をも贈っていることが知られる。

右のことから、津軽藩では昌平坂学問所に学者を研鑽のために派遣した際に、入学時の謝礼金納入や年末に歳暮等を贈っていることが知られるが、これ以外にも、その時節には、それ相当の謝礼や贈物をしていたものと推定される。

次に通学についてである。諸藩から派遣された学生は、すでに各自の藩校で師について基礎学力を充分身につけ、また年齢も旗本・御家人の子弟よりも長じていた。学問所内に設けられた書生寮に入寮した彼等には、試験はなく、同志の切磋琢磨を旨としたという。<sup>(9)</sup>「江戸日記」文化一一年五月三日の条に、

一 作事奉行申出候、御参府こと御座候ニ而ハ御長屋御差支ニ付、黒龍藤太七戸貢子儀、柳原御屋敷江引移之儀伺之通、

とある。右によれば、藤太は貢八郎と共に初めは江戸藩邸の上屋敷（本所二ツ目）の長屋から学問所へ通っていたと思われるが、下谷柳原の中屋敷に移り、そこから通学したことが知られる。「国日記」翌一二年九月二十七日の条には、

一 黒龍藤太申出候、是迄御長屋拝借仕、林大学頭様江通学之處、此節

昌平坂御学問所江寄宿之上研究仕、林家江通学之儀者是迄之通被仰付度儀申出之、願之通被仰付候、

とあり、御長屋は中屋敷のことと推定されるが、藤太は再び移って学問所へ寄宿することになった。寄宿した場所は書生寮であろう。したがって入学後約二年間は書生寮に入寮しなかったことになり、その理由は不明である。さらに「国日記」同一四年一〇月一日の条によれば、

一 黒龍藤太儀、勤学登之処、学業精勤ニ付、公義於御学問所御扶持方被下置舎長手傳被仰付候ニ付、詰合中金貳両勤料増被下置候、此旨可被申付候、

と見え、藤太は書生寮の舎長手伝を命ぜられるに至った。これは彼が優れた人材として認められたからであろう。

書生寮の学生は毎月三回、校内にある儒官（寛政から文化までは、柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里が儒官）の官舎で催される講義・会講に出席するのを常とした。儒官の私宅（官舎）<sup>(10)</sup>教授である。一年二回の詩会・四回の文会も講堂（稽古所）で開催された。藤太もこのようにして研鑽を積んだものと思われる。

「国日記」文政元年八月二八日の条に、

一黒瀧藤太儀、講釈会読詩文会等之節、学問所江罷出教授いたし候様被仰付候、

とあり、藩当局から帰藩して藩校の学問所で講義することを命ぜられた。

これは文化一〇年に昌平坂学問所に入學し、五年の在学期間を経過したからであろう。<sup>(11)</sup>さらに「国日記」翌二年七月一〇日の条に、

一勤学登黒瀧藤太申出候、於御国許御用御座候ニ付、當月中出立被仰付候處、會議殘書籍有之ニ付、當八月迄留學卒業之上罷下度儀、願之通被仰付候、

とあり、再び帰藩を命ぜられたが、八月までに残りの学業を修めてから帰りたいという願いが認められた。九月には帰藩して（藩校の）学問所御用懸になったことが知られる。<sup>(12)</sup>

再度の昌平坂学問所入學については、「国日記」文政五年三月二日の条に次のように見える。

一黒瀧藤太申出候、学業穿鑿自分物入を以江戸表江罷登度、當年々三ヶ年之御暇願之通被仰付、

右によれば、三カ年の勉学期間中の経費は自己負担とし、その間藩校での指導免除が認められた。藤太の研鑽への意欲をうかがうことができる。かくして、四月一日に吉崎慶蔵と共に江戸に到着した。<sup>(13)</sup>「国日記」

同年六月一五日の条に、

一黒瀧藤太儀、於昌平坂学問所編集并詩文懸被仰付、貳人扶持被下置、齋長相勤候様被仰付候旨申出候、

と見え、藤太は昌平坂学問所の編集兼詩文懸に任命されている。「国日

記」同年八月一二日の条には、

一黒瀧藤太申出候、於昌平坂学問所是迄四人扶持被下置候處、去ル廿一日壹人扶持増被下置、舎長是迄之通相勤候様被仰付候旨申出候、  
(傍註筆者)

とある。前述したように、最初の昌平坂学問所入學中に書生寮の舎長手伝をつとめたが、右の史料によって再度の入學中には舎長となっていたことが知られる。しかし、師事した学者や学んだ内容については、記録がなくわからない。

藤太が舎長として名を轟かしたのは、次のような事件によってであった。即ち、「国日記」文政六年一二月二八日の条によれば、次のように見える。<sup>(14)</sup>

(会津藩主)  
一去ル三日、於聖堂松平肥後守様御家来狩野軍兵衛儀、致乱心松井慶蔵并松平肥前守様御家来吉村東兵衛佐賀浪人西村有蔵右三人江手疵負せ候旨申来候ニ付、御醫者高橋雲昌并御留守居下役差遣見分爲致候之処、慶蔵儀三ヶ処得疵候得共浅手之旨委細別紙診察書を以申出候間、則差下申候、

一黒瀧藤太儀、右軍兵衛を取押候旨申出候、  
一右ニ付、藤太儀町奉行にて壹通御尋被仰付候、慶蔵儀茂御尋可被仰付候得共御役宅江罷出候儀難相成ニ付、其儘御留守居江御預被仰付候、

会津藩の狩野軍兵衛が発狂して、文政六年一二月三日に松井慶蔵・吉村東兵衛・西村有蔵に傷を負わせたが、藤太が軍兵衛を取り押えたのである。さらに「国日記」翌年閏八月一〇日の条には左の通り記されている。

(上略) 藤太儀、不取敢軍兵衛を捕押候段手柄之事ニ候。必竟常々心懸宜敷之儀奇特ニ候、依之格段之以御沙汰今日知行五拾石被下置御馬廻被仰付候、(中略)

一林大学頭殿が御留守居御呼出ニ付、杉山鐵衛罷出候處、去十二月三日於聖堂松平肥後守家来狩野軍兵衛及刃傷候節、黒龍藤太、早速右軍兵衛を捕押候所より怪我人茂多無之、必竟平日武道心懸茂有之文武兼備致候儀感入候、隨而格別之御賞之上御召仕被成下度之段、別紙之通被申達候旨御留守居申出候間、別紙兩通差下申候、(下略)

右によれば、藤太が軍兵衛を取り押え、怪我人を最少限にとどめたのに對して、津輕藩から知行五〇石を与えられ、御馬廻を仰せつけられた。また林大学頭(述斎)よりは、武道の心がけもあり文武兩道を兼備していると賞讃されたことが知られる。このように、再度の昌平坂學問所での研鑽中には、武勇伝もあったのである。

「国日記」同年閏八月二四日の条に、

一御馬廻黒龍藤太儀、聖堂諸生寮退寮伺之通被仰付候所、去ル六日同所引取候旨申出候、

一去ル七日同人儀、御国許學問所學頭之取扱被仰付候、猶又人別調役兼相勤候様被仰付候、(下略)、(傍註筆者)

とあり、閏八月六日に書生寮を退寮している。翌日には、藩から藩校の學頭取扱を命ぜられているが、これは經學學頭取扱のことを意味するものであらう。帰藩したのは一〇月であるから、約一年半の江戸滞在であつた。

藤太の三度目の江戸上りは、昌平坂學問所での研鑽を目的とするので

はなく、津輕藩刑法「文化律」の改正作業のためであつた。彼は藩儒の中から選ばれてこの作業に従事することになったが、これは學者の活動の一端を示すものと考えられるので述べてみたい。

「文化律」は、すでに文化七年三月に制定されていたが、天保二年に至り、刑の適用の円滑化をはかるために改正が企てられ、藤太は同年八月二五日に江戸へ到着した。<sup>(16)</sup>「江戸日記」同年九月一〇日の条に、

一黒龍藤太申出候、此度御刑法向穿鑿方被仰付罷登申候間、此節が公邊其筋江罷越穿鑿仕度奉存候間、夫々御差圖被仰付度儀伺之通被仰付候、(傍註筆者)

と見え、關係方面に出向き作業に着手したことが知られる。

この年の師走には、特に世話になった江戸の町奉行与力松浦作十郎に對して、<sup>(17)</sup>「江戸日記」同年二月二九日の条によれば、

一黒龍藤太申出候、御用ニ付松浦作十郎かた江罷越同所ニ而格別扱ニ相成候ニ付、當歳暮祝儀看代相應ニ差遣度ニ付、御金渡方之儀申出之趣不得止事相聞得候間、會所御有品御国織龍門上下地壹具看代金千疋被下置候様、附紙之通被仰付候、(傍註筆者)

とあり、織物の龍紋一揃、看代金千疋が贈られている。

改正案は翌三年五月に一応完成を見たが、<sup>(18)</sup>如何なる改正条文であつたかは不明である。「江戸日記」同三年五月二二日の条に、次のように見える。

一黒龍藤太申出候、此度御刑法心得方川路弥吉殿が逐一預御承度候儀者、林大学頭様御頼入被下候処之儀ニ御座候間、御看一折被遣被下置度儀申出之通看一折被進候様、

一 町方與力佐久間彦大夫儀、御刑法向承合色々取扱ニ相成候ニ付、為御挨拶御肴一折被下置度旨申出之通御肴料三百疋被下置候様、

一 寺社方調役川路弥吉殿江当春々此節迄罷越、御刑法無残所御承度ニ預候間、為御挨拶金千疋御国織上下地被進候様被仰付度儀申出之通被仰付候様、

一 松浦作十郎江御刑法向穿鑿ニ罷越、穿鑿済ニ相成候間、金千疋御肴一折可被下置哉之儀、金千疋御国塗燠縁被下置候様、夫々附紙之通申付之、

右によれば、改正条文が完成し、作業の終了により、林大学頭（述斎）

へ交肴一折、刑法心得方・寺社方調役（寺社奉行吟味物調役）の川路弥吉へ金千疋と国産の織物、町方与力の佐久間彦大夫に御肴料三百疋、町奉行与力の松浦作十郎には金千疋と国産の塗物がそれぞれお礼として贈られた。尚、川路について付言しておく。寺社奉行は、初め自分の家臣から寺社奉行所用の職員を選出して用いていたので、寺社奉行が交代するごとに事務は中断した。そこで天明八年に評定所から留役という幕府直属の士が、寺社奉行に配属され、新任の寺社奉行でも、職務が運営できるようになったのである。この留役は、寛政三年に支配留役と改められ、同八年には吟味物調役と改称された<sup>(19)</sup>。川路弥吉は聖護のことで、右の史料によって吟味物調役を勤めた能史であったことが知られる。彼については「四」の項で詳述することにした。

特に林大学頭へは、「江戸日記」同年五月二六日の条に、

一 黒瀧藤太申出候、御刑法向穿鑿ニ罷越候様々江、為御挨拶御進物被下置候内、林大学頭様江者御使者を以被下置度儀申出之通申付之、

と見え、使者をも派遣して丁重なお礼の挨拶がなされたのである。

かくて藤太は、帰藩のため江戸を六月四日に出発することになり、改正作業に使用されたと思われる書物の運搬に馬の利用も許され、六月下旬には弘前へ到着したようである。

右に見たように、藤太が改正作業を行うに際し、林大学頭を通して事運び、幕府関係者から教示等いろいろ世話になったことが知られる。

また昌平坂学問所で二度に亘り研鑽を積んだ経験から知人も少くないはずであり、記録に残されていないが、多くの人々との接触があったであらう。

註（１）『弘前市史』（藩政編）四九六頁

（２）「黒瀧家記」。羽賀与七郎「弘前藩の学風」（弘前大学國史研究）第三一號所収

（３）『津輕歴代記類』下（みちのく双書第八集 昭和三四年）四六頁

（４）同右 五一頁

（５）羽賀与七郎前掲論文。註（１）五〇五頁

（６）「江戸日記」文化一〇年八月一〇日の条。「国日記」文化一〇年九月五日の条

（７）「江戸日記」文化一〇年八月一七日の条

（８）「江戸日記」文化一〇年九月四日の条

（９）笠井助治「近世藩校に於ける学統学派の研究」下（吉川弘文館）二〇五三頁

（１０）同右

(11) 和島芳男『昌平校と藩学』（至文堂 昭和三七年）九一頁。  
基準が五年であつて、制度として確立された在学期間ではないと思われる。

(12) 「国日記」文政二年九月一五日の条

(13) 同右 文政五年五月三日の条

(14) ( ) は『津軽藩旧記伝類』（みちのく双書 第五集）  
三六八頁により筆者が付加した。

(15) 「黒瀧家記」

(16) 「江戸日記」天保二年八月二七日の条

(17) 「国日記」天保五年一〇月三日の条  
によって、町奉行与力であつたことがわかる。

(18) 「江戸日記」天保三年五月二八日の条

(19) 笹間良彦『江戸幕府役職集成』（雄山閣 昭和四五年）一二九  
～一三〇頁

(20) 「江戸日記」天保三年五月二九日の条

(21) 同右 天保三年六月二日の条

### 三 藩校での活躍

藤太は文化二年弱冠（一〇歳）で藩校稽古館の教官、経学典句に任ぜられ、学生の指導にあたっていたが、同一〇年藩命により昌平坂学問所に入學し、文政二年研鑽を終えて帰藩し、学問所御用懸に任命されたことはすでに二の項で述べた。また前述したように、藩では文化五年に稽古館を

縮小し、弘前城三の丸に学問所を完成して、授業が再開されていた。藤太が城下に在住していた時期には、学問所で学生の指導にあたり、経学を担当していたことはいうまでもない。文化七年正月、学風が古学から朱子学に改められてから後は、教科書は素読用・論語・孟子・詩書・礼記・易经・春秋、会読用・朱子の小学・史記・漢書・左伝・詩書・礼記・周礼・易经・明律諸書であつたから、指導には四書五経が中心であつたことがわかる。

文政七年には、再度の昌平坂学問所での研鑽から帰藩して藩校の経学学頭取扱を命ぜられた。<sup>(2)</sup>三八歳の時である。翌年八月から毎月一〇日に、弘前城本丸御殿芙蓉之間で月並講釈が行われることになった。<sup>(3)</sup>「国日記」同年八月一七日の条に、

一今日於山水之間、黒瀧藤太書経講釈被遊御聴聞候、右ニ付大寄合格とある。  
以上聴聞被仰付之、

右に関連するが、兼松伴太夫が同年八月一二日と二二日に、山水之間で兵書を講釈している。<sup>(4)</sup>したがって、右の史料から藤太が藩校で学生を指導する以外に、藩主（第一〇代信順）・重臣達に対し、山水之間で特別に書経を講釈したものと思われる。

藤太が「文化律」の改正作業を終つて、天保三年六月に江戸から帰藩したのは、四六歳の時であつた。この年以降は、藩にとどまって活動した時期であり、断片的ではあるが年代順に見て行くことにしたい。

「国日記」天保四年三月一〇日の条に、  
一今日月並之講釈有之、講師黒瀧藤太貴田英八勤之、



とある。

これは毎月一〇日に芙蓉之間で行われる講釈である。藤太は具体的に何を講釈したか不明であるが、貴田英八は兵書と推定される。<sup>(5)</sup>

「国日記」同七年二月二七日の条に、次のように見える。

一黒龍藤太申出候、芙蓉之間月並講釈神文左衛門并私兩人に而相勤罷有候處、文左衛門儀、御免願之通被仰付壹人ニ相成申候間、同人代り被仰付度旨申出、長崎慶助被仰付候旨申遣之、

右によれば、芙蓉之間で藤太と神文左衛門によってこれまで月並講釈が行われていた。神文左衛門は何を講釈していたのか不明であるが、事情があつて彼の代わりに長崎慶助が任命されたのである。したがって、儒学者の藤太と長崎慶助の二人が毎月一〇日に行われる月並講釈を担当することになったことが知られる。

「国日記」天保一〇年九月二六日の条に、

一長崎慶助申出候、私儀此度於芙蓉之間月並講釈被仰付候處、病氣差合等御座候之節御間欠ニ相成候而恐入候間、以前之通黒龍藤太江茂可被仰付哉、同人儀者在勤茂御座候間、伊藤熊四郎茂被仰付、以上三人被仰付候者御間欠ニ茂相成間敷ニ付、被仰付度儀、伺之通被仰付之、

とある。これは長崎慶助の申出により、儒学者の長崎・藤太・伊藤熊四郎<sup>(7)</sup>の三人を毎月一〇日の月並講釈のメンバーとして決めておくならば、一人に事情が生じて講釈が不可能になつても支障がなくなるので、三人が認められたということである。「国日記」には、毎月一〇日に芙蓉之間で行われる月並講釈についての記録は、その都度記されてはいないが、

講釈は実施されていたように思われる。

藤太は同年一〇月、学問所小司取扱となり、<sup>(8)</sup>藩校の重鎮としての地位に任ぜられた。「国日記」同年十一月一日の条に、次のように見える。

一今日月並以上於其席々ニ御禮被為請候、其後無程御座敷寄被仰付、御役人詰御用番御家老御先立ニ而竹之間江被為入、牧野左次郎全書黒龍藤太大学講釈被遊御聴（中略）尤組頭初月並以上一統拝聴被仰付之、

一月一日、竹之間で藩主・重臣達に対して、藤太が四書のうち大学を、牧野左次郎が兵書の武教全書を講釈したものである。

第一一代藩主となつた順徳（天保二三年九月二七日順承と改める）は、同年九月四日に初入国しているが、学問の奨励にも力を注いだ。一〇月一日に「今日月並御礼後、講釈経学長崎慶助、兵学貴田英八、公、竹之間御着座御家中一統聴聞」<sup>(9)</sup>とあり、翌一月一日、右の史料（一月一日の条）に見られる講釈が行われているのだから、日付と講釈が行われた部屋から考えて、月並講釈ではなく特別の講釈であつたと思われる。天保二年二月からは、毎月一日と二二日が芙蓉之間で行う講釈日とされ、四書のうち中庸を教科書とした。<sup>(10)</sup>

「国日記」同一四年六月二二日の条に、

一於梅之間ニ黒龍藤太横嶋理三郎御講釈申上候、御下向初而ニ付、御用所向并御城代麻上下着用、

「国日記」弘化二年五月二二日の条には、

一梅之間御講釈経書黒龍藤太兵書横嶋理三郎申上候、相済御意有之、右によれば、梅之間で藤太が経書（書名は不明）を、横嶋理三郎が兵

書（書名は不明）を講釈しており、月並講釈ではなく、特別の講釈であったと思われる。

以上のことから、藤太は弘前城本丸御殿の芙蓉之間で行われる月並講釈のほかに、山水之間・竹之間・梅之間に於いて、藩主や重臣達に特別の講釈をしていたことが知られるのである。

次に昌平坂学問所と藩校との関係についてである。

藤太が昌平坂学問所で研鑽を積み、帰藩して藩校で教鞭をとった関係から、藩校の教官の研鑽と学生の指導のために、昌平坂学問所へより高い指導をも仰いでいたのである。「国日記」天保一四年一〇月一七日の条に次のように見える。

一黒龍藤太申出候、先年御刑法御用に付江戸登被仰付候砌、林家江罷出、當時之<sup>（林述斎）</sup>大学頭様江御国学問所<sup>（添）</sup>学官并諸生之作詩御點削奉願、

其後茂御點削頂戴御直方一同感心仕難有奉存候、隨而此度時候御見舞として千鮑壹箱差上、追々一統之作詩御直頂戴之儀茂奉願度奉存候間、御荷物便之御序を以右進物大学頭様御用人中迄御登せ被仰付度儀伺之通、御臺所頭江茂為知申遣之、<sup>（傍註筆者）</sup>

右によれば、藤太が「文化律」の改正作業で江戸へ上った時（天保二〜三年）に、藩校の教官・学生の作った詩に対して、林大学頭（述斎）の添削を受けていた。その後にも添削を受けたが、今後も添削を願っていたので、時候の挨拶として林大学頭（程字）に千鮑一箱を贈ることになったのである。

「国日記」翌一五年一月八日の条によれば、詩の添削がこの年にも行われた。即ち、

一黒龍藤太申出候、林大学頭様江学問所詩作御直方奉願候付、新鰯差上度鰯御荷物便之節御登せ被仰付度儀願之通被仰付、昨年五本振差登せ、尤鰯之儀者御臺所手を以附上候間、當年茂右之通被仰付度儀願之通被仰付之、<sup>（程字）</sup><sup>（傍註筆者）</sup>

これは、詩の添削をお願いするにあたり、昨年のように鰯を贈りたいというものである（昨年千鰯を贈った―「国日記」天保一四年一〇月一七日の条―後に、鰯をも贈ったのであらう）。

かくて、藤太が昌平坂学問所で研鑽を積んだ折に出来た、林大学頭を初めとする儒官の人脈を通じて、藩校の教官・学生の指導にも力を注いだのである。いわば、藩校の学問隆盛のために、昌平坂学問所と藩校を結ぶパイプ的役割を果たしたことになるう。

第三に、藤太が支藩の黒石藩へ講釈に出向いたことである。

「国日記」天保一二年閏一月八日の条に、次のように見える。

一鈴木帯刀申出候、出雲守在邑中、黒龍藤太相招儒書講釈御頼被申度旨、仍之一月兩三度宛、黒石江泊懸被相越候様被仰付度旨來状を以申出、願之通被仰付之、

右によれば、黒石藩主津輕出雲守承保（黒石家第一〇代）が、黒石陣屋に在住の間、藤太を一カ月に二・三度招いて儒書を講釈させることになったのである。儒書と見るだけでその内容はわからない。

「国日記」同一五年一月二四日の条に、左の様に見える。

一黒龍藤太申出候、出雲守様江毎月講釈ニ罷出候処、雪中ニ茂相成候得者、途中風雪難凌儀茂有之ニ付、右防為用意熊皮壹枚代錢上納之上御拂之儀申出候得共、兼而御拂御差留被仰付罷有候間、難被仰付

候様附紙之通申付之、

藤太は津輕承保の黒石滞在中には、毎月講釈のため黒石へ出向いたが、徒歩か馬を利用したのか交通手段は不明であるが、注意すべきは、冬期間の我慢し難いほどの風雪の日もあったため、防寒具として熊皮の着用願を出したが許可されなかった。これは天保改革による緊縮財政が、その理由の一つであったと思われる。

また、本藩の藩儒長崎慶助が、安政三年二月、津輕承叙（黒石家第一一代）から講釈に招かれているが、老年のため弘前へ黒石間を山駕籠で往復している。<sup>(11)</sup> 当時慶助は六八歳であった。<sup>(12)</sup>

右のことから、本藩から支藩へ出張講釈が行われていたことを知り得るが、冬の交通事情はかなり困難であったことがわかる。

最後に黒石藩の藩校についてふれておきたい。経学教授所は、津輕順徳（黒石家第九代）が長崎梅軒・畑井蟠竜らに命じて、天保三年一〇月に創立されたもので、武術は教授せず、経学・史学を教えた。学派は朱子学である。<sup>(13)</sup>

長崎梅軒は本藩の出身で、前述の長崎慶助の弟にあたる。本藩の学問所に学び、のち昌平坂学問所で研鑽を積み帰藩した。その後、支藩の黒石藩主津輕承保に仕え、経学教授所で藩士を指導し、やがて承叙の侍講もつとめ、家老となっている。<sup>(14)</sup>

以上述べたことから、本藩と支藩の間では、学問の分野でも密接な関係を保っていたといえるであろう。

註(1) 『弘前市史』（藩政編）五一二頁

(2) 「国日記」文政七年閏八月二四日の条

(3) 同右 文政八年七月二四日の条

(4) 同右 文政八年八月二日、八月二二日の条

(5) 『弘前市史』（藩政編）五一六頁

(6) 『津輕藩旧記伝類』（みちのく双書 第五集）三七〇頁

(7) 同右 三三七頁

(8) 「国日記」天保一〇年一〇月十一日の条。『弘前市史』（藩政編）四九四頁によれば、小司は惣司（定員一名）に次ぐ職名で、定員三名である。

(9) 『津輕歴代記類』下（みちのく双書 第八集）一一八頁

(10) 『弘前市史』（藩政編）五一六・五一七頁

(11) 「国日記」安政三年二月一日、二月一二日の条

(12) 「文化一四年丑年学問所分限帳」（国立史料館蔵）によれば、三〇歳と見えるので、安政三年には六八歳となる。

(13) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』（山一〇六・一〇七頁。『黒石市史略年表』（黒石市 昭和五九年）二八頁

(14) 笠井同右書、一〇六・一〇七頁。『津輕藩旧記伝類』三七〇頁

#### 四 師と友人

黒龍藤太が指導を受けた師、及び交流のあった友人には、次のような人々がいる。

藤太が藩校に入学した年月は明らかではないが、校名は稽古館と称さ

れ、学風は古学派の時期であり、大きな影響を受けたと思われる師は、藩校の惣司の地位にあった津軽儼淵<sup>(1)</sup>である。儼淵については、笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』(上)九九頁によれば、『弘前市史』

(藩政編)と『日本教育史資料』(巻三巻十二)を出典として、

○津軽儼淵 古学派、名貞正、のち緝熙、字子壮、称永孚、号儼淵、藩老臣・執政、稽古館督学、山崎蘭洲門

儼淵の家は弘前藩主津軽氏の支族で、世々国老執政。儼淵は初め松田正卿に、のち藩儒山崎蘭洲(道冲)に師事して経史を修め、さらに江戸昌平校に学び、天下の諸儒と交わって学識を広めた。夙に弘前藩に学校の設けなきを歎じ、百万焦慮建言して、ついに初志を遂げ、寛政八年藩校稽古館の開設を見るに至った。督学に任じて創草期に於ける藩校の基礎確立に力を尽した。ついで参政を歴て、藩宰に任じた。著書、周易略説二巻。

と記されている。また彼の薫陶を受けた人材については、

(上略) 笹森達仲、蒔苗市兵衛、松田常蔵、黒瀧藤太、黒瀧彦助、釜泡太一、伊藤熊四郎杯、其外数人皆永孚の力を尽して薫陶せしと

いふ。殊に赤貧の儒者、永孚の衣食を減して煙をあけしめたるもの

多しといふ。<sup>(2)</sup>棟方氏抄録・松田駒水筆記。

と見え、藤太はその中の一人であった。

次に昌平坂学問所に於いて、昌平学派の学問の研鑽を積んだ際の師については、すでに「二」の項で述べてあるが、判明しているのは第一回目

特に佐藤一斎の影響が大きかったと思われる。

佐藤一斎は文化六年二月、江戸藩邸で『論語』を講義しており、その後も藩邸に出入りして講義していたが、文政二年正月藩邸の学問所一弘道館<sup>(3)</sup>が再開され(寛政九年開校、文化二年いったん廃止)、その開筵式にも講義していたことが知られる。このような一斎と津軽藩との関係から考えて、藤太が文化一〇年第一回目の昌平坂学問所入学に際し、一斎に納めた謝礼金や歳暮の金額が「江戸日記」に記されていることは、<sup>(4)</sup>一斎が藤太を指導したことを示すものである。

友人については、「文化一四年丑年学問所分限帳」(国立史料館蔵)によれば、惣司、喜多村源八以下三八名の藩校学問所の職員が見える。この中に藤太も名前を連ねているが、これらのメンバーは、藤太の上司・同僚・友人であったと思われる。しかし、どの程度の交際があったのか不明であり、「国日記」「江戸日記」「津軽藩旧記伝類」等に記された津軽藩士の友人を拾ってみると、次のようになる。

奥瀬一学については、『津軽藩旧記伝類』(みちのく双書 第五集)三三三頁に「幼年より漢籍に勉励し、黒瀧彦助、同藤太、伊藤熊四郎等、皆学友たり」とあり、同書三六八頁には「奥瀬一学人に語りて曰く、予壮年交る処の学友、黒瀧彦助兄弟を初め、菊池形左衛門、伊藤熊四郎、其他頗る多し」と見え、<sup>(5)</sup>藩校に学んだ頃からの友人と思われるが、彼は第一〇代藩主津軽信順の用人をつとめた人物である。

七戸貢八郎は、文化一〇年藩命により藤太と共に昌平坂学問所に入學したことは「二」の項で述べたが、<sup>(6)</sup>文化一三年八月江戸で病死したといわれる。<sup>(7)</sup>

伊藤館四郎は、「文化一四年丑年学問所分限帳」によれば、藩校に於ける藤太の同僚であった。天保一〇年九月には、藤太・長崎慶助と共に弘前城本丸御殿で行われる月並講釈を命ぜられ、そのメンバーの一人であったことが知られる。<sup>(8)</sup>『津軽藩旧記伝類』五三八頁に、伊藤について次のように記されている。

幼年より学を好み、津軽永孚を初め、其頃の諸先生に従て学ふ、  
(第九代藩主)

寧親公御代、文政二年正月藩費を以て江戸にて勤学被<sup>レ</sup>仰付<sup>一</sup>、同

六年三月帰国、直ちに又大阪にて勤学被<sup>レ</sup>仰付<sup>一</sup>罷登り、同七年閏

八月江戸へ帰り、公へ御目見被<sup>レ</sup>仰付<sup>一</sup>勤学科増被<sup>レ</sup>下置<sup>一</sup>、同年

九月帰国学問所ニ教授被<sup>レ</sup>仰付<sup>一</sup>、同八年二月再大阪へ勤学登被<sup>レ</sup>

仰付<sup>一</sup>同所ニ六年罷有りて天保元年帰国、信順公御代、文政十年十

月朔日書院番組頭格学問処経学士被<sup>レ</sup>仰付<sup>一</sup>、新ニ一家を成す、順

承公御代、嘉永三年四月廿二日学問所小司加勢被<sup>レ</sup>仰付<sup>一</sup>、同四年

二月十六日死去。伊藤氏由緒書(傍註筆者)

長崎慶助は、「文化一四年丑年学問所分限帳」によれば、伊藤と同様に藩校に於ける藤太の同僚であった。天保七年二月に、藤太と共に弘前

城本丸御殿で行われる月並講釈の担当を命ぜられ、同一〇年九月には、

藤太・伊藤と共に月並講釈を命ぜられ、そのメンバーの一人に選ばれて

いる。<sup>(10)</sup>『津軽藩旧記伝類』三七〇頁に、長崎について左のように見える。

長崎慶助、名弼、号<sup>ニ</sup>金城<sup>一</sup>、性質直して学に志し、東都に於て而

佐藤一斎に就て学ふ事年あり、詩文に長し、下藩の後稽古館の教

授を司り、後に小司となる。順承公の時、天保十一年正月御錠口

役を兼、常に経書を侍講し、承昭公世子の時、慶助を江戸に召し

召す。

藤太が昌平坂学問所で学んだ際に知った他藩の友人は、笠井助治「近

世藩校に於ける学統学派の研究」(山一〇二頁によれば、『弘前市史』

(藩政編)・『日本教育史資料』(巻十二)を出典として、「同門の草

場佩川・安積良斎・松崎慊堂等と切磋琢磨し親交厚かった」と見える。

草場は佐賀藩弘道館教授、安積は二本松藩敬学館教授から、昌平坂学問

所儒官となった人物であるが、藤太とどのような交流があったのかは不明である。松崎慊堂は、掛川藩徳造書院教授となり、門下に塩谷宕陰・安井息軒・林伊太郎・海野石窓等が輩出した。<sup>(13)</sup>

松崎慊堂との関係は、『慊堂日暦』(1)一五一頁、文政七年閏八月

一七日の条に、次のように見える。

十七日 蒲生の招に因り、本庄某(久留米の文学)の庵舎に集まる。

余は名流と会せざること久し。蒙斎は吾が故郷なり。例を破つてこ

れがために山を出すこと一日。この日会する十一人。蒙斎(山村

留守)、沢田(名は重微、字は伯猷、山村)、主人の本庄一郎(名

は謙、字は搗謙)、墨瀧(松山)、高橋善次(名は栗、字は公謹、

号は桐陽)、平井廉助(名は篤、字は子信、号は弦斎、小古賀の徒)、

息焉 大夫、有馬織部(長照、字は子成)、余等三人。この日の詩

題「菊に芳あり」「某母を寿す」「十七夜観月」。(下略)

右の『慊堂日暦』の底本として使用された、静嘉堂文庫所蔵の慊堂の

一七日の条に、次のように見える。

十七日 蒲生の招に因り、本庄某(久留米の文学)の庵舎に集まる。

余は名流と会せざること久し。蒙斎は吾が故郷なり。例を破つてこ

れがために山を出すこと一日。この日会する十一人。蒙斎(山村

留守)、沢田(名は重微、字は伯猷、山村)、主人の本庄一郎(名

は謙、字は搗謙)、墨瀧(松山)、高橋善次(名は栗、字は公謹、

号は桐陽)、平井廉助(名は篤、字は子信、号は弦斎、小古賀の徒)、

息焉 大夫、有馬織部(長照、字は子成)、余等三人。この日の詩

題「菊に芳あり」「某母を寿す」「十七夜観月」。(下略)

右の『慊堂日暦』の底本として使用された、静嘉堂文庫所蔵の慊堂の

一七日の条に、次のように見える。

十七日 蒲生の招に因り、本庄某(久留米の文学)の庵舎に集まる。

余は名流と会せざること久し。蒙斎は吾が故郷なり。例を破つてこ

れがために山を出すこと一日。この日会する十一人。蒙斎(山村

自筆本によれば、墨瀧（松山）の松山は松山藩士の意味で、下の高橋善次にかかるのが正しい。<sup>(15)</sup> 墨瀧は『慊堂日曆』の中で、ここだけ一カ所見えるにすぎず、慊堂が記録する際に、黒を墨と誤記したものと考えられないこともない。断定はできないが、黒瀧だとすれば、藤太を含めた慊堂等一人が、本庄家で詩を詠む会合を催していることが知られるのである。

「御用格」弘化四年四月二十六日の条によれば、<sup>(16)</sup>

一黒瀧藤太申出候、仙台中入江長之進国分平藏両人私江面会仕度旨宿を以申出候、尤先年江戸勤学中懇意仕候、同藩より茂来状御座候而面会仕度儀伺之通、

右によれば、仙台藩士の入江長之進と国分平藏の二人は、昌平坂学問所勉強中の藤太の友人であり、弘前城下に住む藤太を久しぶりに訪ねたものと推定される。

その他の友人として次に示すと、「国日記」嘉永四年五月五日の条によれば、

一黒瀧藤太申出候、仙台様御家中太田盛石沢俊平儀、松前表江遊歴仕度よしニ而御當地江相廻、昨日慈意之者より之紙面等持参仕逢具候様申候、伺之上対面可仕答ニ御座候得共、今日出立之旨に付難默止対面仕候、恐入奉存候得共御聞届被仰付度儀申出、此度者御聞届被仰付、以来差懸ニ而茂伺之上致対面候様被仰付之、

右の史料から、藤太は仙台藩士の太田盛・石沢俊平から面会を申し込まれた。<sup>(17)</sup> 本来ならば、藩主の許可を得てから面会すべきであるが、その手続きをしている時間的余裕がなく、無許可で面会した。藩主へ伺いを

立て、許可を得てから面会せよと仰せつけられたというものである。

「国日記」嘉永二年七月五日の条に、

一黒瀧藤太申出候、奈良御奉行川路左衛門尉殿江書状并進物差上度儀願之通被仰付候間、進物入小箱并書状添御同所用人中迄差遣度奉存候間、御用便を以江戸表江御登、江戸表より大坂江相廻、大坂より奈良御奉行所江相達候様被仰付度儀、願之通被仰付之、

右の史料によれば、藤太が奈良御奉行の川路左衛門尉へ、書状を添えた贈物を遣すことを許可されたものであり、遠く奈良方面にも幕臣である友人がいたことを示すものである。

川路左衛門尉は、「二」の項で述べた寺社奉行吟味物調役の川路弥吉と同一人物で、川路聖謨のことである。<sup>(18)</sup> 彼は文政一〇年寺社奉行吟味物調役となり、天保六年出石藩主仙石家の内紛の断獄にあたり、奉行脇坂安童を扶けて能吏として名を挙げ、勘定吟味役に拔擢され、同一一年佐渡奉行、翌一二年小普請奉行、同一四年普請奉行、弘化三年奈良御奉行、嘉永四年大坂町奉行を歴任、翌五年九月勘定奉行に昇進し海防掛を兼ねた。同六年長崎来航のロシア使節と交渉し、翌安政元年日露和親条約に調印した。同五年堀田正睦に随行して上京し、日米修好通商条約勅許獲得に奔走したが、一橋派と目され、井伊直弼大老就任とともに左遷された。文久三年五月外国奉行に起用されたが、一〇月に老疾をもって辞した。明治元年三月一五日の朝、江戸開城も目前にあるを察して、辞世を残し、割腹のちピストル自殺をした。また平素文筆に親しみ多くの遺書を残している。

藤太が天保二年から三年にかけての「文化律」の改正作業に際し、川

路からいろいろと教示を受けたことは、すでに「二」の項で述べたが、その後も交際が続いていたことは、右の「国日記」嘉永二年七月五日の条によって知ることができる。

また藤太は、天保七年碓ヶ関町奉行を兼任し、同九年には鯉ヶ沢町奉行兼任に転じ、藩の重要ポストにあたる役人でもあった。学問の分野のみならず、行政面にもかかわっていたのである。

藤太が月並講釈や特別の講釈を弘前城本丸御殿で行うために、藩主や重臣達と接する機会もあり、幕府や朝廷の動向が、幕府の川路から藤太を通じて藩当局の耳に入っていたことがあったであろう。勿論、江戸藩邸から国元へ情報が連絡されてくるのはいうまでもない。

右に述べた幕臣の川路と藤太の関係からは、具体的な新しい事実が判明したわけではなく、推定の域を出ない一例ではあるが、このような観点から、他の人物についての綿密な分析がなされるならば、幕末から戊辰戦争にかけての津軽藩の動向が、一層明らかになるものと思われる。

以上述べた他藩の友人については、藤太が昌平坂学問所で研鑽中に知りあった友人のほかに、江戸滞在中にできた幕臣川路聖謨のような友人もあつたことが知られる。しかし、これらの史料に記録された友人以外にも、東北地方から関西方面にかけて、友人が存在したことは推測できるであろう。

註 (1) 『津軽藩旧記伝類』三六八頁

(2) 同右 六七頁

(3) 『弘前市史』(藩政編)五〇六・五一三・五三六頁

(4) 「二」の項で述べた「江戸日記」文化一〇年八月一日、同

年二月二七日の条

(5) 「一」の項、註(2) 参照

(6) 「二」の項、註(6) (7) (8) 参照

(7) 『弘前市史』(藩政編)五三六頁

(8) 「三」の項で述べたが、「国日記」天保一〇年九月二六日の条参照

(9) 「三」の項「国日記」天保七年二月二七日の条参照

(10) 同右 「国日記」天保七年二月二七日の条参照

(11) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』(下)一六一七～一六一八頁

(12) 同右 (上)二〇一頁

(13) 同右 (上)五九〇～五九一頁

(14) 山田琢訳注 東洋文庫一六九 平凡社 昭和四五年 引用部分の○印は筆者による。

(15) 山田琢氏のご教示によるものであり、深く謝意を表したい。

(16) 「御用格」  
従文政八年  
至弘化四年

申立之部(市立弘前図書館蔵)。「国日記」には見えない。仙台藩士の両名についてご教示を願えれば幸いである。

(17) この兩名について『宮城県史』等には見えず、ご教示をお願いしたい。

(18) 弘前大学助教授長谷川成一氏より、幕臣の川路聖謨について種々ご教示をいただいた。記して謝意を表する次第である。

(19) 「国日記」天保七年二月二五日の条

(20) 「国日記」天保九年一月二一日の条

## むすび

以上、四章にわたって、藩儒黒龍藤太の昌平坂学問所及び藩校に於ける活動を中心に述べてきたが、まとめると次のようになる。

(1) 藤太は学者として成長する環境に比較的恵まれていた。長兄は藩儒黒龍儀鳳(昌平学派・林述斎門下)であり、義兄弟に藩校初代教学頭の中田勇蔵がおり、叙父には藩儒薄田多門(古学派・稽古館副督学)がいたのである。

(2) 藤太は二度にわたって昌平坂学問所で研鑽を積み、また江戸に於いて津輕藩刑法「文化律」の改正にも尽力した。

藩命による最初の昌平坂学問所入学は、文化一〇年八月で、佐藤一斎に師事した。同一四年一〇月、書生寮の舎長手伝を命ぜられ、一斎のほか柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里の薫陶も受け、文政二年九月に帰藩したのである。

二回目は、自費で文政五年四月から約二年半在学した。その間に、書生寮の舎長をつとめ、名声を轟かしたのは次の事件による。即ち、同六年一二月、会津藩士狩野軍兵衛が発狂して学問所で刃傷事件をおこし、藤太が軍兵衛を取り押えたので、林大学頭(述斎)から文武両道を兼備していると賞讃されたのである。

三度目の江戸上りは天保二年八月で、藩儒の中から選ばれて「文化律」の改正作業を行うためであった。それには林述斎を通して事を運び、刑

法心得方・寺社調役(寺社奉行吟味物調役) 川路弥吉、町方与力佐久間彦大夫、町奉行与力松浦作十郎等から教示を受け、同三年五月に改正条文が完成して六月に帰藩した。しかし、この改正案は施行されなかったようである。

(3) 藤太が藩校学問所の教官として活躍した様子は、次の通りである。

二〇歳の文化二年八月から経学典句として学生の指導にあたっていたが、最初の昌平坂学問所での研鑽を終えて帰藩し、文政二年九月学問所御用懸に任命され、経学を担当した。三八歳の時である。同七年一〇月には再度の研鑽から帰藩し、経学学頭取扱となっている。

藩にとどまって活躍した時期は、「文化律」の改正作業を終えて帰藩した天保三年(この時四六歳)以降である。藩校で学生を指導する以外に、特に弘前城本丸御殿の芙蓉之間で、毎月一〇日に行われる藩主・重臣達に対する月並講釈を担当していたが、同一〇年一〇月に学問所小司取扱となり、藩校の重鎮の一人となった。月並講釈のほかに、山水之間・竹之間・梅之間等を使用して、藩主・重臣達に大学や中庸等、特別の講釈をも行なっていたことが知られる。

次に、藤太が昌平坂学問所で研鑽を積んだ折に出来た、林大学頭を初めとする儒官の人脈を通じて、藩校の教官・学生の詠んだ詩の添削指導の仲介をしている。これは藩校の学問隆盛のために、昌平坂学問所と藩校とを結ぶパイプ的役割を果たしたことになる。

第三に、本藩の藩儒長崎慶助や藤太等が、支藩の黒石藩主に招かれて出張講釈をしていることや、本藩出身の長崎梅軒(慶助の弟)が、黒石

(聖謨)



藩の藩校経学教授所の教官になっていることが知られる。右のことは、本藩と支藩間では、学問の分野でも密接な関係を保っていたことを示すものである。

(4) 藤太の師と友人については、藩校の師の中では古学派の藩儒津軽永孚であり、昌平坂学問所では儒官の柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里のほかに、佐藤一斎の影響が強かった。

津軽藩士の友人では、第一〇代藩主津軽信順の用人となった奥瀬一学、藩儒の伊藤熊四郎・長崎慶助等がいる。昌平坂学問所で学んだ時の友人には、佐賀藩弘道館の教官草場佩川、昌平坂学問所儒官安積良斎、掛川藩徳造書院の教官松崎慊堂等が知られ、仙台藩士の入江長之進・国分平蔵もいる。このほかに仙台藩士の太田盛・石沢俊平が知られる。

特に幕臣として有名な川路聖謨との交際は、津軽藩にとって、幕府や朝廷の動向を知る上で、重要であったと推定され、藩が激動する幕末の政治情勢に対処するための情報源の一つにもなっていたように思われる。

記録には見えないが、藤太には東北地方から関西方面にかけて、広範囲にわたる友人がいたものと推測される。

かくて、黒瀧藤太が藩校教官として果たした役割の大きかったこととは別に、幕臣川路聖謨との交際によって藩政に及ぼした影響も小さくはなかったと思うのである。

(青森県立弘前実業高等学校教諭)